

「イスラエル建国史」

20 運動の中心地となった イギリス その1

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人

第一次世界大戦時、大方の予想に反し、シオニズム運動はアメリカのブランダイス、ロシア出身のヤボチンスキー、そしてイギリスのワイツマンという3人のユダヤ人によって大いに発展した。ブランダイス（合衆国最高裁判所判事）は、アメリカにおけるシオニズム運動の定着に、ヤボチンスキーは大英帝国軍内にユダヤ人部隊を結成することに貢献する。そして3人目のユダヤ人、ハイム・ワイツマンを中心として、ユダヤ人国家建設に向けた動きがイギリスで本格化するのである。

シオニスト運動が躍進するロシア

第一次世界大戦でシオニスト運動が飛躍的に拡大したところが、あと一つある。ロシアである。当時ロシアはフィンランド、バルト三国、ポーランド、ウクライナを含み、ユダヤ人社会の規模が世界一であるとともに、反ユダヤ的環境も世界一であった。1917年時点の東部戦線は、ドイツ軍がロシア国内まで進出し、戦場周辺で再びボグロムが発生、さらにはガリシア（ガリチア、戦後ポーランドに編入）地方でも数十万のユダヤ人が路頭に迷っていた。

ロシアのシオニスト運動は、大戦中期まで停滞していた。ヘブライ語、イーディッシュ語によるパンフレット発行が禁じられるなど、さまざまな抑圧的規制を受けていたからである。しかし、1917年3月11日（露暦2月26日）に勃発した革命が状況を一変させ、シオニズム運動は発展を始める。戦前2万5,000人であったシオニストメンバーは、1917年春一挙に14万人に拡大し、1918年初めには30万人に達した。

運動躍進を踏まえ、1917年6月6日全ロシア・シオニスト会議の創立大会がペトログラードで開催された。この都市は後にレニングラードと改称され、現在はサンクトペテルブルクと呼ばれている。

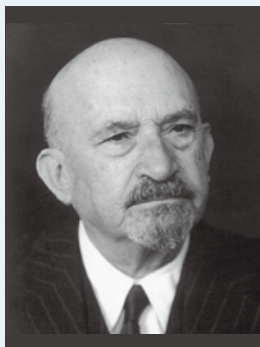
大会はエヒエル・チシレノフ（1863～1918）を会長に選出し、ロシアに

おける自治区設立とパレスチナの郷土建設支援を決議した。医師のチシレノフは、メナヘム・ウシシュキン（前出）と共にホベベイ・ツィオン運動で活躍し、ヘルツェルのウガンダ案に反対して退席した一人である。調整力が抜群で、ヘルツェルの死後世界シオニスト会議の会長就任を要請されたが、固辞した。戦時中前半は中立主義をつらぬき、ユダヤ難民の救済を第一にしていた。

ユダヤ人で革命に一縷の望みを託す人もいたが、メンバーの急増は、彼らがロシアに絶望している証拠であった。

ワイツマンとバルフォア

しかし運動の中心は大戦中イギリスに移った。ハイム・ワイツマンそしてそのパートナーとなったイギリスの政治家、ロード・アーサー・ジェームス・バルフォアの存在が大きい。バルフォアは、首相時代（1902～05）の1905年7月19日、議会でユダヤ人



ハイム・ワイツマン



バルフォア



滝川 義人
Takigawa Yoshito

1937年長崎県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使館チーフ・インフォメーション・オフィサー（1968～2004）として勤務。

現在、MEMRI（メモリ、中東報道研究機関）日本代表。ユダヤ、中東研究者。

主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』（新潮社）、『ユダヤを知る事典』（東京堂出版）など多数。

のイギリス移住が多数派社会の脅威になると発言し、議会や新聞に批判され、ウガンダ案をめぐる議論が沸騰した第7回シオニスト kongress（1905）では激しい非難を浴びた。ロシアで発生したボグロムでユダヤ人難民が生まれ、イギリスに移住地を求めた頃の話である。しかしバルフォアは個人的にはユダヤ人に強い関心を抱き、彼らの窮状に同情していた。キリスト教徒は聖書の民に恩を受けているが、お返しを全くしていないと述べたこともある。

1906年、ワイツマンはマンチェスターでバルフォアと会った。同地の保守党員チャールズ・ドレフュスの紹介による。当時バルフォアは首相を辞任し、野党となった保守党のリーダーという立場にあった。その時バルフォアは、首相時代チェンバレン植民地相の提示したウガンダ案をユダヤ人達が拒否した経緯を、話題にした。

「何故パレスチナでなければいけないのか。シオニズムの原点をエルサレムだけにおく理由は何か」とバルフォアは問うた。するとワイツマンは「それではお聞きしますが、私がロンドンの代わりにパリを提示したら、お受けになりますか」との問いに対して問いを以て答えた。「しかしワイツマン博士、我々には昔からロンドンがある」、「その通りです。我々にはエルサレムがありました。ロンドンが沼地だった頃ですが」とワイツマンは言い返した。

ワイツマンの人柄と思想

バルフォアはワイツマンを見つめながら、「妙だな、私が会っているユダヤ人は、そんなことは言っていないが」と呟いた。社会的地位のあるユダヤ人達のことを言ったのである。彼らは同化論者であった。

「あなたは、誤ったユダヤ人達にお会いになったのです。私と同じ意見の者が数百万はいます。しかし、その声をあげることはできません。でも、彼らとなら私は父祖の地への道筋をつけることができます」とワイツマンは自信をもって答えた。

当時ワイツマンは32歳の若僧で、マンチェスター大学の一化学講師にすぎなかった。ワイツマンの開発した澱粉発酵によるアセトン生産法が、第一次世界大戦時英軍の爆薬製造に貢献する。しかしそれは後の話であり、当時はシオニスト機構の重要な肩書はなく、一介の活動家にすぎなかった。しかしワイツマンは強靱な意思と抜群の判断力を併せ持ち、さらに人を惹きつける力があつた。指導者にとって絶対必要な資質である。

ロシアのモトル生まれのワイツマンは「イスラエルの地にユダヤ人のナショナルホームを認める」国際社会の宣言を得る政治運動と、精神文化の振興を伴う開拓運動の二つを組み合わせ、合成、シオニズムの提唱者であった。

トルコ参戦後の1914年11月、マンチェスター・ガーディアン紙の編集長C・P・スコットの紹介で、ワイツマンはロイド・ジョージ軍需相(当時)とハーバート・サムエル内相(同)に会った。二人はワイツマンの話に共鳴し、サムエルは本件でアスキス首相に覚書を提出してもよい、と言った。

そして1915年初め、ワイツマンはサムエルの勧めでバルフォア海相(当時)に会った。バルフォアは9年前の出会いをよく覚えていた。そして、挨拶もそこそこに、「私は9年前の話をずっと考えていた。私の信じてるところによると、砲声のやむ前に君はエルサレムを手にする」と言っ

た。バルフォアは、海軍大臣としての立場から、爆薬増産法についても、ワイツマンの開発技術に関心を示した。ロイド・ジョージも然りである。

サムエル内相と覚書

後年、英委任統治領パレスチナの初代高等弁務官となるハーバート・ルイス・サムエル(1870～1963)は、ユダヤ教正統派の家庭に生まれ育った。洗礼を受けずにイギリスの大臣になった最初のユダヤ人である。1909年に特命事項担当無任所相(正式名称はランカスター公領相)となり、第一次世界大戦時は、通信相や内務相を歴任した。ユダヤ人問題に心を痛め、シオニズム運動に関心を抱いていたが、運動が成就することはないと考えていた。

転機は、トルコの参戦、そしてワイツマンとの出会いである。ワイツマンの熱意に動かされたサムエルは、アハッド・ハ・アム(前出)の思想に立脚し、新しい文化の中心になるユダヤ人国家の建設と、中東におけるイギリスの権益の確保を基本とするたたき台をつくった。そして、これに多少手を加えて覚書とし、1915年1月にアスキス首相に提出した。さらに3月になって、サムエルは覚書を修整した提案を各界に回覧した。それは次の4項を骨子とする。

1. パレスチナ全体をイギリスの保護領にする。
2. パレスチナにユダヤ人自治国をつくる。
3. ユダヤ人団体に土地の購入、開拓村建設、教育及び宗教施設の設立と運営を認める。
4. 経済開発に協力する。

アスキス首相は関心を示さず、グレイ外相やロイド・ジョージ軍需相(当時、弾薬相ともいった)を含む閣僚達は関心を示したが、具体的行動に出ることは



ハーバート・サムエル

情勢の変化とイギリスの対応

ガリポリで激戦が続いている頃、トルコ敗北後の中東経営をめざすイギリスとフランスは、トルコ支配地の分割統治を話し合うため、1915年11月23日ロンドンで第一回会議を開いた。話し合いを

重ねた結果生まれたのが、サイクス・ピコ協定で、正式には1916年の小アジア協定と呼ばれる(サイクス・ピコ協定は、1920年4月開催のサンレモ会議がイギリスにパレスチナの委任統治権を認めたことにより、意味がなくなり失効した)。

しかしイギリスは、ガリポリ戦に敗北し、ヨーロッパと中東・アジアの結節点であるダーダネルス海峡の制圧に失敗。さらに1916年後半ドイツが東方で攻勢に転じる徴候が出てきた。セルビアは大敗し、同盟側に立つブルガリアは全く動揺していない。つまりドイツからバグダッドそしてシナイ半島への道が開いているのである。トルコ軍のスエズ攻略部隊にドイツの軍事顧問がついていたのは、すでに判明している。トルコを敗北に追いこめず、パレスチナを独占的に支配できなければ、スエズ運河の確保は万全ではない、と考えられた。

しかしまた、イギリスの戦略上の要請は、米ウィルソン大統領の領土併合反対の原則と、かみ合わなかった。ロシアの臨時政府も然りである。

イギリスは、連合諸国と敵対しないで、戦略上の要請をみたす方策を考えなければならなかった。

それは、民族自決の原則を導入することで解決できるとされた。少数民族の解放闘争と現地住民の独立支援と組合せれば、名目がたつのである。



ロイド・ジョージ